

書評：「芙蓉軒日録抄」

|       |                                                                                                    |
|-------|----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2018-05-11<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 和田, 秀樹<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.14945/00025060">https://doi.org/10.14945/00025060</a>                  |

## 書評



### 「芙蓉軒日録抄」望月勝海著

(旧制静岡高等学校同窓会 編集・発行)

静岡地学第84号に、元神戸大学教授の杉村 新先生が出版予告された、故望月勝海教授の日記「芙蓉軒日録抄」が出版された。本著は旧制静岡高等学校の創立八十周年記念行事として企画され、昨年（平成14年）11月に静岡市で開かれた記念式典で披露された。旧制静岡高等学校は静岡大学の前身にあたり、「芙蓉」とは、柔らかな大花をつける低木であり、蓮の花や富士の姿をも意味する。

望月勝海教授（もっちゃんと呼ばれていた）は、明治38年の生まれで、昭和16年36歳の折り、第四高等学校（現金沢大学）から旧制静岡高等学校に赴任された。昭和38年、胃ガンのため58歳で亡くなるまで、旧制から新制静岡大学の教授を勤められた。この日記は、昭和16年に金沢から静岡に赴任されたころより、昭和25年の旧制静岡高等学校での最後の授業までが抄録されている。私事ではあるが、学生のころ望月教授のお名前は恩師故鮫島輝彦先生より、「その名文の誉れ高きこと」はお聞きしてはいたものの、生の言葉に接することはなかった。この日記は、ちょうど太平洋戦争のまっただ中の全編非常時における、一人のあるべき文人教師の記録として、学問や学校、学生、家族に向けられた細かな心配りの詳細が簡潔にしてさわやかに、そして穏やかにして豊かに、その雰囲気を感じ取ることができる。

昭和20年（1945年）6月、米軍の空襲を受けて、いまは城北公園となっているが、大岩の旧制静岡キャンパスの教室は焼失した。夜間空襲のため、望月教授は未明に大学に赴き、燃え仕切る校舎の窓を破って教室に進入し、鉋物顕微鏡などを抱えて屋外に運び出した。このお陰で、終戦後の新制大学発足時に、他の実験器具が全くない時代に、只一顕微鏡だけは燦然と輝く研究手段となった。時は過ぎて、元キャンパスには当時の面影を残すものは何一つなくなってしまったが、現在、大谷キャンパスの大学会館ロビーに展示されている「文理学部大岩学舎の模型」が辛うじて当時の雰囲気を伝えている。その頃の地学教室は博物教室と言っていたらしい。望月教授の風格を一言で表すと「旧制高校の教授らしい趣を持つ人」というのがぴったりである。この日記の随所から、ゆったりとした教師、学者としてのありようが伺われ、その姿が目浮かぶ。現在は研究手段に事欠かず、業績至上主義に振り回され、落ち着きのない大学の状況である。これらとは比べようもないが、先生が今おられたら、どのような感想を述べられるであろうかと、時間の戻らない空間を恨めしく思う。

この本は同窓生限定で印刷された非売品のため、書店では扱っていない。多少の部数は旧制静岡高校同窓会の事務局を通して購入可能（2,000円）であるが、残部は少なく、現在入手することは困難と思われる。私の手元に2冊ありますので、ご希望の方は連絡ください（連絡先：電話；054-238-4791）。

和田秀樹（静岡大学理学部・地球科学教室）